

日口関係の転機としての 日口戦争

コンスタンチン・サルキーソフ



議長ありがとうございます。みなさんお疲れと思いますがどうぞよろしくお願いします。日口戦争は日口関係の歴史の1つの転機であったことは言うまでもないと思います。150周年を迎えた日口関係史を区分化するのには学問的な課題である。見方によって違うと思いますがまずお断りさせていただきたいのは、私は歴史学者ではなくて政治学者として、その歴史を見てみよう、政治学の観点というのは日本とロシアとの間にどういう対立が存在していたか、つまり求心力とか遠心力のことを追求しようと思っていたきっかけとなってきたのはやはり北方四島の問題です。ゴルバチョフの時代に私が勤めていた東洋学研究所の所長であったプリマコフの家京で領土問題をどう解決すればいいのかと考えていたときのことである。ここに出席しているクラフツェヴィチ先生も同じ研究所に勤めていました。彼も覚えていると思います。その時には新思考外交、新しい思考の外交を行うために、戦後に残っている北方四島の問題をお互いに受け入れ可能な妥協で解決できるのではないかという雰囲気になっていたころである。

後にハーバード大学で木村先生とハーバード大学アリソン教授と一緒に日口米の専門家が参加したプロジェクトに取り組んでいた。解決の方法を見出すために努力していたのです。歴史を振り返ってみれば日口関係にはどういう論理が働いていたかということを検討した時にピンときたのは、どういうふうに区分化すればいいのかと考えていた。それは基準によって違うのですが、私は単純に5つの段階に分けたのです。必ずしも歴史学者から見れば完璧ではないかもしれませんが。ただよく考えてみたら、18世紀から現在までたどってきた最初の段階というのは、明らかにお互いに知り合っていて、基本的な動機というか原動力、推進力となっていたのは、貿易とか経済関係です。それはいろんな文書から出てくるのです。ピョートル大帝の時代から改革をやって、近代国家というか、帝国として台頭するわけです。その時にはもちろん拡張主義というか自分の領土を拡大するのは帝国の戦略である。フィリモノヴァ先生の話の中にもあったのですが、内陸的な存在であったロシアは海への出口を追求する。トルコとスウェーデンと戦って黒海とバルト海への出口を収めたがヨーロッパの方向へ拡張するのは余裕がなく、正反対の「東へ」の拡張は十分な余裕があった。膨大な地域だったのですが、誰にも属していないのです。少数民族はいたのですが、別に戦争をする必要がありませんでした。17世紀の後半から18世紀の末まで太平洋海岸までの膨大な地域を制覇してきた。カムチャツカ半島に出てきて、オホーツク海などあちこちに拠点を作ったのですが、基本的にその地域に残るためと、その地域を開発するために隣国との貿易は必至となった。

あまり詳細に入ると時間がかかりますが。「誰にも属していない」土地を制覇し、これ以上の膨

張を考えていなかったのは事実である。逆に隣の国と仲良くしなければならない状態だった。2つの文書を採り上げたいです。1つはカテリーナ2世の時に、アイヌ人数百人をロシアの国籍にしていた人が、カテリーナ2世に報告すれば、彼女は「解放しなさい!」と、「これ以上の領土の拡大は得ではない。貿易するのは別だ」との思考である。また、どうしてか分からないのですが、中国とケンカをしてはいけないと彼女はその文書に書いている。その地域では千島を含めて、特にサハリンは中国の支配の下に置かれていると思っていたのです。当時、極東の地域は遠いので自分で開発できなくて、手が届かないということです。

もう1つの文書は明らかに次の世紀です。アレキサンダー1世の命令ですが、露米会社に訓示するがウルブ島以南には行ってはいけない、それは日本だというロシア皇帝の常識で、つまり日本とケンカするとか、自分の領土をあまりにも拡大すれば意味がないとか、基本的な関心は貿易であったということです。

次の段階は、地政学的な対立の時代であり、それはいつはじまっているかと、和田先生と話をしていました。私は日清戦争だと思っているが朝鮮半島と満州を巡る対立は本格化するのには19世紀の80年代である。つまり貿易は推進力だとの時代と違って、経済的な動機もちろんあって、帝国の拡張主義は推進力になってくる。ただ日ロ関係史で地政学的対立が明らかに勃発するのは、日清戦争です。日清戦争のあと、下関条約、フィリモノヴァ先生の話にもあった、その時に三国干渉があります。

みなさんよくご存知だと思いますが、三国と呼ばれているロシアが一番です。ロシアはやはりその地域を自分の関心の地域として見ていて、いろいろあったのですが、基本的にはその対立は日ロ戦争に展開してきました。戦争を回避するチャンスがあったのです。最終的に満州ではなくて日本とロシアの対立の種になっていたのは、朝鮮半島です。ロシアは大連、旅順を租借地として手に入っていました。日本にとってかなり悔しいことだったのです。自分が戦争で血を流して手に入れた領土を、あとでロシアの重圧によって追い出され、撤退した。数年後にロシアがやってきたということです。それは心理的には大きな痛手だったと思いますが戦略的にも危なかった。

これを乗り越えて、次は義和団事件です。欧米、ロシアと日本、みんな中国に軍隊を派遣していた。そのときロシア軍と日本軍は肩を並べて蜂起した中国人と戦っていた。余談ですが、東郷平八郎提督のひ孫からいただいたものですが、ロシア皇帝のニコライ2世が東郷平八郎に、ロシアの最高勲章のひとつである聖アンナ一等勲章を授与する法令のコピーがあります。

ところが、義和団事件が収まると、みんな撤退したがロシアは満州に残っていた。日本にとってこれも大きな打撃で、結局影響力の強い伊藤博文さんたちが、満州はロシアであれば、朝鮮は日本の支配を認めてもらうほかはないという論理に従ってロシアとの妥協を見出すために動き出した。伊藤博文がロシアと戦争するための日英同盟に署名する前にパリに滞在するのです。桂首相から、早くロンドンに行って署名していただきたいというメッセージを受け、彼はちょっと待ってくれと、ペテルブルグに行きます。ひょっとすれば妥協を見出すかもしれない。ペテルブルグに行っても、ペテルブルグの首脳は好戦派と妥協派に分かれ、好戦派が支配的だった。皇帝は珍しく、妥協派の1人だったのです。それを証明する文書はたくさんあります。「日本と戦争をしてはいけない」、「戦争をしたくない」ということを閣僚に言っています。ベゾブラゾフ国務長官を通じてアレクセ

ーフ提督宛の電報には、「結局、私は朝鮮を全部日本にあげるということにしていた」と言う旨のことを強調している。

地政学的なバランスから見れば、朝鮮は中立的な存在ではありえない。日本が恐れていたのは、次はロシアが朝鮮にやってくる。それを裏付ける文書もたくさんあり、特に海軍の方にはたくさんあります。それはなぜかと言うと、朝鮮を日本に譲る気がない理由は旅順だったのです。朝鮮半島に日本軍がいたら、旅順は危ないのだということです。それは完全に地政学的な配慮です。だから私はそういう言葉を使ったのですが、地政学的な悪循環なのです。1つの領土を手に入れると次に行かないといけないう領土拡張の悪循環である。旅順と大連、これもヴィッテは自分の回想録に書いています。一番大きな間違いだったのは満州の押収です。満州に進出して中国との関係が悪くなってきて、日本との戦争は不可避的になってきたということを書いています。

皇帝は最後まで戦争をしたくないということですが、彼にとって旅順攻撃は寝耳に水だったのです。やりたくないということで、閣僚にも命令していたのです。ただ側近の人たちの利権もあったのですが、ベゾブラゾフ国務長官とアレクセーフ極東地域総督またローゼン駐日ロシア大使もそうなのです。アレクセーフ総督が一番悪かったと思います。ヴィッテが書いているように、彼の人種はロシアではなかったから、ロシアの民族主義者でした。「ローマ法王よりカトリック教徒」の現象です。ラムスドルフ外務大臣が戦争してはいけないと考えていたのは、もっと配慮しなければならないのはロシアの中心から一万キロ離れている極東地域よりヨーロッパだと、イギリスはもちろんですが同盟関係のドイツとフランスも信用しないほうがいいと、特にドイツはロシアの勢力は極東の戦争に足が引っ張られ、泥沼状態に陥ったらヨーロッパでロシアは邪魔しないという計算もあった。ロシアの関心事は極東より、ヨーロッパなのです。だから日本との戦争は要らない。皇帝はその論理を頭で分かっていたようですが意思の薄弱な、決断力もなく非常に影響されやすい人で、戦争をしてはいけないと言っていたが側近はそのとおりにやってくれないし、日本と戦争したくない、彼の希望はかなえられなく、戦争になってきた。戦争になると皇帝の心境も変わってくるのですが、その戦争を最後まで、勝利まで戦わないといけないうふうになってきます。

余談ですが今年の4月に奉天に行っていました。奉天会戦の現場を見てきました。写真を撮ったのですが、2つの記念碑が建って、ひとつはロシア戦没者のためであり、800メートル離れて日本の戦没者の記念碑がある。それは日本の支配の時代、1908年くらいに建てられた記念碑です。2つともボロボロになっているので、それは恥ずかしいということです。100年も経っているのだから修理しないのは恥ずかしい。

奉天、次は日本海海戦。ロシアの一連の敗北だったが、戦争を続けろという意見もあったが革命による内乱の影響もあって、結局皇帝はポーツマス講和に踏み出す。当時のヴィッテ全権とロシア政府の機密文書のやり取りはその微妙な状態を明快に描いている。1905年8月18日付の三通の電報は手に入っていた。日本の要求は12項目あったが、1日だけでほとんど全部放棄したのです。残ったのは賠償のことである。そのために北サハリンをロシアに譲る決心をして戦争の賠償金ではなくて、北サハリンの代償としてもらおうという動きである。

結局ポーツマス平和条約で日本は北サハリンも譲ったが、お金をもらわなかった。戦争が終わってから、対立は妙に地政学的な同盟関係に転換してきます。日ロ同盟関係が頂点に達しているのは

1916年、そのときに締結された「協定」は例えば日本は外国に侵略される際に、ロシアはただ協力というのではなくて、軍事的な協力を日本に提起するということです。文書の中に駐米ロシア大使の秘密電報があります。1916年の日ロ同盟条約を気にし、アメリカは大騒ぎになっていたわけです。第一次世界大戦の最中ですがロシアはかなりヨーロッパの戦場で困っていたわけです。武器も足りなくて、鉄砲を買いに日本に行くのです。その代表団の団長は天皇陛下に謁見し、明治天皇が亡くなられてまだ喪中だったにもかかわらず大正天皇が外国人には会わないが、ロシア人に会ったのは、日本がいかにその関係を大事にしていたかが分かります。その同盟関係というのは、同床異夢という点もあったと思います。ただ地政学的な利害関係が一致していたので、両国は接近しているわけです。

一年後に、1917年2月と10月には二回のロシア革命がおきる。2月の革命によってできたロシア臨時政府は完全に日ロ同盟体制を維持していたのです。その通りで外交を継続しようとしていました。社会主義のロシアになると、新しい対立が生まれました。思想的な対立です。この前のブレハーノフについての先生のお話にもあったのですが、かなり社会主義的な観点というか、戦争はやはり資本家と地主の利権のための戦争であるということです。プロレタリアートの利益は全然ないのだと訴えられた。社会主義革命は新しい世界を目指し、その世界は「戦争と侵略や没収のない国際関係」、新しい思考を堂々と宣言していた。そうするとレーニンの政府はまず日本との1916年の条約の内容を公開して廃棄してしまった。だが思想的な対立だけではなくて、地政学的な対立も残っていたのです。消えてしまったわけではないのです。地政学的な対立はロシア内戦の時には日本はシベリアに出兵して顕著となってきた。シベリア出兵の口実があったが、皇室の関係もあったが基本的に日本はロシア帝国が崩壊すると極東地域の領土はほったらかしになるとしてアメリカやイギリスの先にこの領土を自分の手に入れようと思っていたようです。ウラジオストクから撤兵したのは最後で、1922年のことである。ロシアを極東地域の沿海州から追い出すのは英国の夢であり、日ロ戦争のひとつの目的だったらしい。イギリスに言われていたのですが、「ウラジオストクまで行きなさい」、「ウラジオストクを占領して、それを日本の領土にしなさい」という英国の当時の働きかけである。つまりロシアが崩壊すると自分の影響圏を拡大する絶好のチャンスで、そういうこともありました。ただ時間が経てば経つほどソビエト政権が足場を固めて、日本軍は1922年に極東地域から撤退します。1925年に北京でソ連という国家を認めて、国交を樹立するわけです。それはずっと続くのですが、第二次世界大戦の前に地政学的な対立、思想的な対立があって、ノモンハン事件とか武力衝突がありました。

1941年、日ソ中立条約を結ぶためにクレムリンで松岡洋右がスターリンに会います。その時にはかなり面白い会談が行われ、思想的な対立より思想的な親近感が現れてきた。松岡洋右が急に日本の天皇制はモラル的なコミニズムであるといったり、アングロサクソンのリベラリズムが共通の敵であると強調したりしていた。スターリンは慎重に「われわれもアングロサクソンは好きじゃない」と云々していた。

日ソ中立条約は1946年に終わるはずだったが、途中でスターリンがその条約を廃棄して日本に宣戦を布告した。その背景には地政学的動機は支配的だったと思いますが、思想的な側面もありましたが、スターリンのメンタリティーは英国と米国と変わらない。結局、日本帝国は運命付けられたの

で基本的な問題は戦後その帝国の「破片」を誰が手に入れるのか、典型的な地政学的な状態であった。日本は中国、朝鮮から撤退する。つまり戦後のこの地域の仕組みというのは、当事者になるために日本との戦争に参加しなければならない。参加しないと当事者ではないというのは戦後の新秩序作りには地政学的な獲得はない意味である。

戦後の世界というのは明らかに第三番目の対立は前の二つに加わってきた。冷戦構造的対立である。冷戦構造というのは、第二次世界大戦後の世界は米ソの超大国対立の仕組みになってくるわけです。いわゆる社会主義陣営と資本主義陣営の対峙は地政学的と思想的、両面の対立が再燃し、また核兵器もできて、60年代の中ソ対立もあって、複雑なシステムになってきたがその仕組みの中で日本はアメリカの陣営の一員になってきた。

領土問題の発生はスターリン型の領土的な欲張りもあったが戦争中の地政学的な配慮の産物である。日本を最悪の敵とみなしていたアメリカ大統領は日本が再び脅威にならないためにその国を弱体化しようと思って、まずその領土を最小限にし、ポツダム宣言では日本の領土とは「四島しかない」という方式が採択された。千島に関しては自分なりのいきさつがあって、1943年のテヘラン会議でルーズベルトはスターリンに会って、最初の打診をしていたが、まだ核兵器、原爆もなく、日本は負けるまでは時間がかかると思っていたわけである。日本が負けるのは45年ではなくて46年、47年、ひょっとすれば、48年になるかもしれない。アメリカ軍が日本の本土に上陸すると、日本人は侍魂を発揮し、頑固腕で戦うだろう。日本は一度も占領されたことはないの、それは大変な精神で戦うのではないかと推測していた。そうするとアメリカは勝利のために100万人の英霊の代償を払わなければならない。日本を早めに敗北させるためにルーズベルトはソ連軍が参加してほしい気持ちになっているのです。真珠湾攻撃で反日的になって、また戦争初期1年間日本軍に完璧にやられていたのです。アメリカの歴史にはこういうことがなかったわけです。1年間、日本は完璧にアメリカ軍を大変な力でやっつけていたわけです。戦争直後GHQのトップになったマッカーサーは戦争中恥をかってマニラから逃げてしまったのです。ヤルタ会談の密約になります。ヤルタでのスターリンとルーズベルトの覚書のやり取りは全部残っています。その前のいきさつもあって、1944年12月、アメリカ大使ハリーマンはクレムリンでモロトフ外務大臣とあったときに、ソ連は日本との戦争に参加すると伝えられた。ただ条件を付けるわけです。条件はいろいろありました。例えばドイツとの戦争が終わってから3ヶ月後とか、旅順、大連、南サハリン、日ロ戦争で失われた領土は全部返ってくるということです。ただ急に千島についての話をする。千島についての話は、そのやりとりが文書に残っています。千島は日本の領土で全島が平和的に1875年にサハリンに交換された領土なので、ヤルタ会談でソ連に「引渡される」と規定されている。返還ということではなくて、引き渡すということです。全然意味が違います。スターリンがどうしてこういうことを説得していたかと言うと、軍事的には必要なのです。日本との戦争はまた数年間続くから、千島から日本を爆撃するために、また海軍が出港するために基地が必要だと説明しているわけです。今回、ルーズベルト大統領は一刻もためらわず、すぐに賛成しました。「千島はちょっと違うのだ」という一言だけで千島は日本の領土として残っていたかもしれない。スターリンはいずれの場合も日本との戦争に参戦するでしょう。千島のためではないのです。主に中国のためです。

こういう意味で領土問題が生まれてきて、1991年のソ連の崩壊まで続いていました。基本的な問

題は、1991年にソ連という国が崩壊すると、冷戦の関係には終止符が打たれた。以上の三つの対立の種が消えてしまった。ロシアはかなりめっちゃくちゃな資本主義で初歩的な民主主義ですが社会主義ではありませんから、思想的な対立はないでしょう。また1991年の革命は明らかに共産党の政権を打倒した反共革命です。冷戦はない、地政学的な対立はない、地政学的な対立がないどころかごく最近まで両国は芽生えつつある大国の中国に関して共通の関心を持っていたわけである。そうすると、どうして平和条約を締結できないのか、どうして領土問題も解決できないのか。何が障害であるかというのは、大問題です。

今の段階は、過渡期で、まだそのはっきりした利害関係が浮き彫りになっていない。過渡期というのはまず前の影響も強いです。つまりまず不信なのです。お互いに信用していない。いつもゼロサムゲーム的な考えなのです。譲れば自分はマイナスである。相手はプラスである。全部プラスというか、“Win-Win”という方式にするのは、なかなか難しいという気がします。私はその第5の段階がどうなるかという答えはありません。参考のため検討するためです。【パワーポイントで写真を紹介する】これは東郷平八郎です。聖アンナ勲章をあげるということになっていたわけです。それは1902年です。これはアレクセーフ総督への皇帝の命令です。朝鮮における日本の領有を認める決心、完全に全部ロシアにあげるということです。この文書は戦争の直前ですが、つまり最後まで皇帝は頑張っていたのです。もし日本が朝鮮に侵攻すればこれもいいのだと。あまり反応してはいけない。北まで行けば何とか戦争を開始してもいいのですが、ただ最後まで我慢なさいということです。ここに私のつまらない翻訳で出てきます。

これは戦争の前の御前会議といいますか、1月15日、プラス13日で28日ですが、フィリモノヴァ先生の報告の中にもあったのですが、参謀本部の方が反対していたということです。ここに陸軍大臣、「日本との戦争をしてはいけない、それはロシアにとって国難になる」ということを言っています。アレクセーフは日本との戦争が国難になるかもしれないが回避できない。なぜかという、ロシアの使命は、日本の野望を抑止し、その地域に自分の影響を波及することにあり、これはロシアの偉大なる使命です。

最後ですが、時間がないのでこれをお見せします。これはどう思いますか？ これは11月5日、私はロジェストヴェンスキー提督のひ孫を連れて、佐世保に行った。ロジェストヴェンスキーが捕虜になって、佐世保の帝国海軍の病院に入院していたのです。残っている建物は外科棟で彼が手術を受けていたところで、今は米軍基地内なのです。それは非常に象徴的で面白いかもしれない。これはロジェストヴェンスキーのひ孫です。この方は東郷のひ孫なのです。ただ直系ではなくて、東郷平八郎の二男の孫です。いま、現職の海上自衛官です。少し東郷さんにも似ています。もう1人は、佐世保の米軍基地の司令官です。その司令官は非常に気さくでわれわれを暖かく歓迎してくれた、自分でも積極的にその儀式、植樹に参加しました。その木はコブシと言います。古い武士、つまり武士の魂を大事にしている。ロジェストヴェンスキーと東郷平八郎は古武士であるということにちなんでその木が選ばれたそうです。もう1人は現在、佐世保の自衛隊の総監です。この方はロシアに好意的で、2000年に外国の海軍の士官として初めてカムチャツカに行って大変お世話になったと情熱を込めて話をしていた。夕食会で「乾杯」の代わりにウラー(ロシア語で「万歳」の意味)と叫んでいたのです。100年経って、こういう行事ができるのは、かなり珍しいと思います。さっ

き言いましたように、何がまだ残っているかということは問題です。以上です。

（Константин Саркисов 山梨学院大学教授）

森岡清美著 四六判・356頁・3570円
真宗教団における家の構造 増補版
社会学の視点から多角的に考察し信念を伝承する家の根強い作用を解明。
細谷孝吉野英岐劉文静佐藤利明・小林一穂他著—A5判・460頁・8610円
再訪・沸騰する中国農村
一次調査から10年を経て市場経済化下の典型的な華北平原農村の変化を分析
吉原直樹編著—菊判・300頁・6600円
アジア・メガシティと地域コミュニティの動態
大都市の空間変容と社会編成を見定め、地域コミュニティの存在根拠を解明
大久保 武著—菊判・300頁・4780円
日系人の労働市場とエスニシティ 地方工業都市に就労する日系ブラジル人
不況下における日系人労働者の雇用・労働・生活を構造的・実態的に解明
佐藤彰男著—A5判・270頁・4800円
テレワークの社会学的研究
理想とは異なる現実となったテレワークの実態を分析し、社会的意義を検討。
水野谷武志著—A5判・300頁・5460円
雇用労働者の労働時間と生活時間 国際比較統計と
仕事と生活のバランスを保ちつつ男女が共同参画できる社会をどう実現するか
中田照子編著—A5判・260頁・6000円
国際比較・働く父母の生活時間 育児休業と
近年の女性の雇用労働者化による家事と雇用の二つの役割を考察
ドウルシラ・マール／仲正昌樹監訳 菊判・300頁・6000円
イマジナリーな領域 セクシナル・ハラスメント
「イマジナリーな領域への権利」保護の視点で正義論の可能性を模索する。
武蔵大学社会学部編—A5判・各・1500円
変わりゆく社会と人権
人権を考えるために 矢田部圭介／現代の社会的な不平等と人権 橋本健二／
親しい人からの暴力 国弘陽子／愛のかたちと差別 偏見 守如子／先住民
の権利とは何か 内藤 暁子／在日ブラジル人が挑戦する言葉・心・法の壁 ア
ンジェロ・ロイシ／ホームレスと社会的排除 武田尚子／監視社会をどう生き
るか 戸田桂太／フアッションとメイクにおける創着と呪縛 栗田宣義／人
間らしい死にかたを考える 大屋幸恵／他 金澄道子・高井葉子 好井裕明執筆
多様化するメディア環境と人権
表現の自由と人権 小玉美意子／情報環境の変容と人権 匿名性と規範 小田
原敏／取材行為と人権 報道現場の事例から 戸田桂太／記録 番組と先住民
族 小川正泰／ハラエティ番組と外国人の主張 アンジェロ・ロイシ／ア
CMにみる女性像と性別ステレオタイプ 山下玲子／インターネットと誹謗
中傷 粉川 一郎／メディアアクセス権 松本恭幸／在日外国人とエスニック・
メディア 白水繁彦／在日外国人向け新聞をつくり続けて 小池昌

 **御茶の水書房** 113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
ホームページhttp://www.ochanomizushobo.co.jp/